

| | |
|------|-----------------------------|
| 論題 | 松平造酒助江戸在勤日記一元治元年八月十八日～九月朔日一 |
| 著者 | 根本佐智子・古宮 雅明 |
| 掲載誌 | 神奈川県立博物館研究報告—人文科学— 第41号 |
| ISSN | 0910-9730 |
| 刊行年月 | 2014年（平成26年）10月 |
| 判型 | A4（210mm × 297mm） |

【資料紹介】

松平造酒助江戸在勤日記

— 元治元年八月十八日～同九月朔日 —

根本 佐智子
古宮 雅明

『松平造酒助江戸在勤日記』について（解題にかえて）

本資料は元治元年（一八六四）八月に江戸市中取締の任に当たるため出府した庄内藩士松平造酒助による、元治元年八月十三日～慶應元年（一八六五）八月十一日の「日記」である。平成元年に古書肆から購入したものであるが、それ以前の伝来については不詳である。こより紐で仮綴じされた状態で五十綴ある。第二～五十綴には本文とは別紙の表紙が付けられて、朱異筆で「二」～「五十」の通し番号が記されているが、第一綴には「表紙」がなく、第一紙右上隅には「一ノ二」と記されている。この綴が年・月の記載もなく、いきなり記事が始まっていることを考慮すると本来の第一綴は失われたと推定される。失われた第一綴に本資料全体を表す名称が記されていた可能性はあるが、現存の各分冊表紙には「日記」「日々控」などと記される。したがって『松平造酒助江戸在勤日記』という資料名は当館が収蔵したときに付したものである。各綴の大きさは、第四綴～第九綴は横半帳で概ね縦一二五mm×横一七四mm、その他は縦帳で同縦二四〇～二五〇mm×一六七～一七七mmである。丁数は二丁から二十丁まで区々である。

松平造酒助は庄内藩士松平武右衛門久徴の長子で、名前は柚之助、久茂（『新編庄内人名辞典』）。同家は代々組頭役や家老職に就く庄内藩の上級家臣で、久徴の家禄は千四百石である。文久三年（一八六三）十二月に家督を嗣ぎ、翌年正月に組頭役、慶應元年十一月には御家中武器取扱掛を拝命するが（高橋種芳「編年私記」〔鶴岡市史資料編 庄内史料集 16-1〕、慶應三年（一八六五）九月十九日に三十六才で病没している〔庄内人名辞典〕）。

【キーワード】

松平造酒助 庄内藩 元治年間 江戸市中取締 新徴組

【要旨】

当館所蔵「松平造酒助江戸在勤日記」の翻刻。筆者松平造酒助は庄内藩士、家禄は千四百石。組頭や家中武器取扱掛をつとめた人物である。造酒助は元治元年八月より慶應元年八月まで江戸に在勤している。本稿は元治元年八月十三日～同九月朔日まで、全五十綴のうち、「一ノ二」、「二」の途中までを掲載した。随所に入る挿し絵が興味深い。

庄内藩は文久三年四月幕府から江戸市中取締を命じられ、取締を實際に担う新徴組を預けられた。藩士は一年交替で江戸に出てその任に当たることになり、造酒助も元治元年八月に出府を命じられ、家中組を率いて江戸市中取締に従事した。日記は造酒助の一年間の江戸勤務の記録である。内容は、①家中組や新徴組による市中取締や、庄内藩江戸藩邸の動きなどの公務に関する諸情報、②巷間の出来事や噂話、市井の風俗など造酒助が見聞きした諸情報、③私事に関する事、などである。①からは幕末の緊迫する政治情勢に対応する庄内藩の動きや、同藩支配下で江戸市中取締を担った新徴組の活動を知ることができる。②では庄内―江戸往復時の道中の様子や、江戸市中の風俗などが活写されている。③では特に食べ物に関心が高く、道中旅宿の献立をはじめ、勤務中や日々の食事などを事細かに記している。また職務柄からか武器（特に銃などの火器類）にも強い興味を示している。本資料の大きな特色は随所に巧みな挿画が描き込まれていることで、彩色画も多い。挿画が加わることによって文字だけでは伝わらない造酒助の江戸生活や江戸市中の様子が生き生きと再現されており、本資料の大きな魅力ともなっている。ほぼ毎日記されているが、「日々留候事に不相成、一三日過思出候假折々認」などともあり、必ずしも日毎に記されたわけではないようである。各綴の表紙には異筆で「此日記九月三日立御飛脚便りにて同月十二日宿へ御小性頭月番より相届達候」（第二綴）、「此日記九月廿三日孫九郎下二付詠さし下候」（第六綴）などと記され、各末尾は家族宛の書状となっている。庄内・鶴岡への幸便に託してその日までの日記を家族に送っていたことがわかる。日記は留守家族への近況報告の役割もあつた。各綴の丁数が異なるのは幸便の都合が区々だったためであろう。

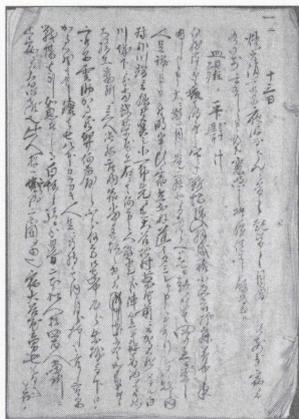
一年足らずの記録ではあるが、幕末期の江戸市中の様子や、庄内藩と

江戸市中取締の動向を知る好資料であり、随所に入る挿画も興味深いものである。これまで、日野市立新撰組のふるさと歴史館の展示などで一部が紹介されたことはあるが、全体は紹介されていないので、活用にするために翻刻紹介することにした。今回は第一綴と第二綴の途中まで（元治元年八月十八日～同九月朔日）を翻刻した。以降の分についても今後随時紹介して行きたい。

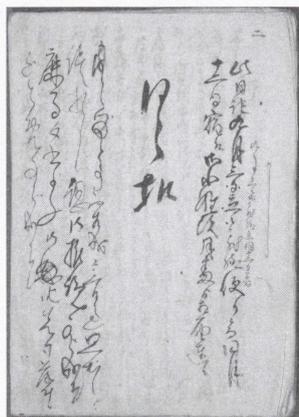
（解題の文責は古宮にあるが、造酒助履歴等の情報は根本の調査による。日記翻刻は根本が行い、古宮が補った。）

凡例

- 一、文字は原則として常用漢字を用いた。変体仮名はすべて平仮名としたが、例外として格助詞の江はへに改めた。適宜句読点を補った。
- 一、明らかな誤字・脱字は右傍に（ ）で正しい字を示し、推定できるものは（カ）とした。意味不明の場合は右傍に（ママ）を付した。
- 一、原文中の朱筆は「」で示し、（朱筆）とした。また原文の虫損・破損・判読不能の箇所は字数を推定し、「」または「」等で示した。
- 一、原文中の抹消文字は基本的に掲載せず、訂正文字のみ掲載した。
- 一、平出・台頭は二字あけ、欠字は一字あけとした。



「一ノ二」 250×175mm
表紙なし 墨付き八丁



「二」 255×175mm
表紙共墨付き十六丁

【第一冊】

【朱筆】ノ二 十三日

燈火消最早夜明ならんと皆々起、皆々目摺く起支度、宿にて九ツ前二可有之と申候得共、窓明いたし杯と催促いたし、飯為出ル

皿 貝柱 玉子
アンカケ 平 蕪フサ 汁

何程致候ても夜は明不申、寒さ難堪、綿入羽織袷小夜着掛寝、夢中夜明候と申大ニ驚目ヲ覚、寢処にて考候へハ、先二起候頃は四ツ過二可有之、人足詰候と申二付、明半頃宿立出ぬ、道イタミシと申二付歩行シヌ、牧之内村外川端にて腰付食シ、小一郎先二遣、大谷地村茶屋前にて駕籠タテル、白川城下二至、両端茶屋在、右ニは何方之人数登二哉、陣笠半被着酒ヲ吞居、大橋在番所二三人張居、庄内宿当春焼候由にて尔今出来不申候、最早雲助駕籠昇、何声やら不分、何方御家中やら乗掛にて下ル、駕籠も有之、鎗は七八本カラカキ人足ニ為持、其内自分持候も有之候、最早戰場ニも至候如思そしる、白坂之駅ニ至日暮、二本松人数四百人当所ニ止宿にて大混雑也、此人数ハ宇野宮固メ由也、宿大谷屋勇七暮過着、水風呂二入、膳出ル

皿 南禅寺 平 干貝 茄子
茗荷 大角豆 猪口 梨子
カラシ合 汁 不給

夜具之荷物不着、宿ノ夜具出し難余義掛臥し、蚤カシラミカカヒサ難堪、夜九ツ過二可有之、荷物参候由二付、早々取替伏シ

十四日

曇、朝遅ク相成、明過膳出シ

皿 泥鰌 伊タラシニ引
茄子 平 茗荷 大丸麩 汁 青物 香物 茄子

膳出前二茶ト梅干出、腰弁当工入ル、二本松人数立不申前二出立、良平昨夜白川迄来シ由、津軽人数、三春人数追々行逢、会津通行之節とハ大違、塗笠、輕袴、稽古着色々之出立ニテ往来引不切、切棒ハンタニ乗、雲助声不分、実大道繁栄難筆紙尽、境明神石鳥井前ヲ通、名物餅、駕籠之内にて見、食もセジ、芦野駅辺歩行シ、余佐川洪水ニテ橋落、連台渡し有之、大井川連台とハ大違ナラン、馬ハ歩行渡也

今日は二十八坂越、富士見坂モ雲不見、浪人桶籠シ筑破山ヨリ外見シ



雨少々降、駕籠二入越堀駅ニ至検断有之、少行河有之、橋落舟渡、鍋掛村茶ニて腰付食シ、半蔵・勝兵衛ウント吸、る音甘ソウ也、同茶屋ニ二本松人数四五人參、ウント代錢問答奇妙也、茶屋女負候哉申訊いたし、早々立、雨ニて雲助大濡酒代ねタラン、七ツ前大田原入口橋落舟渡し、脇本陣増小甚地^(マ)右衛門へ着、白木造ニて上段有、大名ノ顔シテ床前座付、当所菓子出シ美事也、茶出シ、水風呂二入、膳出ル

- ナマリ 干ヘウ
- 皿 醤油かけ 平 ニラフサ 猪口 茄子
- 初也 玉子 胡磨

飯モリ女七八人も居、間コトノ宮仕^(給仕)ニ出賑々敷言葉合戦奇妙也、庄内之人ヲ田舎ナリトテ笑候様子也、間ことノニて手ヲ叩コトヤカシ^(マ脱セ)、蚊不居、大街道ニも出候故幸便アランと思共無之、日記認候も甚面倒也、道々橋落川岸崩故大難也、駅々人数之出居止宿六ヶ敷可有之杯と申者有之、古河城下若年寄田沼玄蕃頭大将ニて、野木駅兩所ニ一万余止宿いたし居候由、宇津宮ニは大名衆固メ居候由申事ニて心配也、何卒早々無事着度祈念外無之、夜四ツ過ニ良平荷物宰領して漸追付、九日ニ下野駅ニ至候て今刻ニ相成、一同無事賀悦候

十五日
雨、明過支度出来、膳出ル

- 皿 玉子 豆腐
- フハク 平 ニラフサ 汁 茄子

宿より駕籠ニて出立、昨日よりの雨大弱り、大田原外左之方に梨子棚林有之、橋落船場ニ至大廻シテ渡り、作山駅ニ至、両端客屋一軒コトニ女とも居いつれも美人ニ可有之哉、駕籠之内殊ニ遠目也、雨小晴ニ相成後ニ聞候しニ、道ニて御飛脚ニ行逢半蔵書状誂遣候由也、会津早駕籠行

逢ニ駕也、駕籠声胸ニ障ル甚イヤ也、喜連川ニ至、鮎之名物も大洪水ニて皆流候由也、検断前大混雑也、昼時ニ相成候故、茶屋ニアカル、吸物出シ

- 長皿 玉子焼 蓮根 豆腐
- 吸物 玉子焼 能塩梅也
- ナマリ小串 茗荷

人足も揃しと申ニ付立出ぬ、又々会津早駕籠ニ逢、何事ニ有之哉両度也、声ハ甚イヤ也、雨具一同着シ、今日月見八幡祭礼所々賑々敷、嘸庄内ニは赤飯団子杯と有之、伝吉掛り居候半、悪津^(阿久津)、鬼怒川ヲ舟渡し行、先番小一郎戻り来候、但昨夜白沢駅ニ止宿、今朝立候故、若々宇津宮迄御通ならハ雇人足ニ相成と申ニ付、如何可致哉と承候処、止宿之事ニ申遣候、庄内宿福田善之助へ暮前着候、茶菓子出シ、水風呂入、今日ハ明月なれとも団子も豆も唯足ノ豆斗、膳出ル

- 皿 鮠 キノコ
- 閉口 平 茗荷 汁 茄子
- 蓮根 造芋

宿娘二九位天下無双美人と可申哉、是迄見候事終ニ無之、陰ニて承レハ半蔵迄ホメル、旁いたし、勝兵衛次ノ問尻は付不申由、蚊沢山早々伏候、月見ナリトテ酒と肴出候

- 一、砂鉢 玉子焼 葡萄 出シ伏候故次下ル
- 生姜

十六日
昨日より雨、早々起拵テ茶出シ

- 皿 玉子 平 泥鰌
- 茄子 汁

明半前旅宿出立、駅外より両端松ノ並木、御成街道と申、九日之風、此
 辺大風ならん、大杉数百本コケ又ハ中程よりヒシケタル在、オソロシキ
 風ニテ往来止り候由、いつれ通者ニても有之候哉奇也(カ)と嘯して通
 ぬ、宇野宮ハ格別之処ニ無之、庄内宿米屋五左衛門迎ニ出立寄、茶菓子
 出シ、貫目改も濟候由申ニ付宿ヲ出ル、日光街道両端松ニ日路程有之
 由、日本一ノ泥道大弱り、蹀迄泥也、田ノ中ニ入候同様、七里程歩行、
 暮頃小山駅菱屋甚左衛門へ止宿、庄右衛門書状達、問屋より届候、十九
 日千住駅より着候事ニ申置也、水風呂ニ入茶菓子出シ、膳出ル

雨天、早く起一同催促し支度出来、膳出ル

同十七日

| | | | | | | |
|---|----|---|------|----|----|------|
| 皿 | 油揚 | 平 | 玉子 | 汁 | 吸物 | 青菜 |
| | | | ニラフサ | | 玉子 | 至極よし |
| | | | 青菜 | 猪口 | 青菜 | |

茶梅千出シ、腰付ニ油揚梅干入、明半頃宿ヲ出、俣田駅通、野木駅過今
 日も松レ両端也、古河城下ニ屯居候歩兵追々陣払也、人ニテ市中見通候事
 不相成、町屋は二階下一杯二居、惣勢一万程と申事ナレ共、如何可有之
 哉、いつれ千余ハ居候半、福嶋之板倉様ハ先陣之由、七頭位、昨夜同宿
 之二階二板倉公藩中二人、遊女呼大騒キ也、宇津ノ宮より多ク筑破ヘ加
 り、其内家老之嫡子も有之、公義向大不首尾ニテ家老耆人切腹、一人ハ
 閉門被仰付候由無相違由、両寄手方負候て、実ニ大事と可申、昨夜小山
 駅仙台早駕籠通り、寢居候得共、旁淋敷た葉粉吞(たばこ)、少目覚候、今日承候
 処、宇津宮固之由右之為の早追ならん、庄内ニテ考候と違、道中皆固可
 有之兵(歩兵)歩通行他家人数引も不切候故、少も懸念は無之、逢候程者は皆味

方也、



手鎗持候者歩兵長

今晚は小山泊り之由、昨日此人数参候て止宿相成間敷ト申、幸昨夜泊り
 「一」通過、古河通候後ハ庄内同様何ニも房川舟渡して、御番所通候処、
 御番所長詰之者御出入なりとて兩人草履ニテ出、大雨也、会釈して通り、
 土手ニ上り見下候処一円水ニ相成居本道通候事不相成、土手通る、栗橋
 駅不残縁下ニ水通り居、十日頃は五尺位も付シ候由、戸障子ニテ家拵住
 居いたし居候躰、目も不被当、二里位目及丈湖水ことし、無慙至極、土
 手栗餅食し、夫より歩行、土手切レ膝節丈水ヲコキ、深処は舟ニテ渡し、
 実難義書難尽、中村坂右衛門と舟行違候処、坂右衛門、織人より書状被
 頼候間、御家来渡候趣申聞、先番惣吉ならん、幸手駅糸屋清次郎暮過一
 同丈夫ニテ着し、大濡相成、風呂湯余り悪敷ト申ニ付不入、織人・□人・
 半蔵迄書状達、千住迄前日為知候様申越候、茶子茶出シ、膳出ル

早々伏し

十八日

雨天、前支度出来候て、毎日之雨大弱り、茶構、如何にては可有之候、勝兵衛へ出候様申付シ

皿 貝 平 豆腐 汁 茗荷 香物 砂鉢 ヨセ玉子

雨追々晴模様相成、道之悪敷事無類、とん二田ノ中同様、今日帷子にて暑シ、昼頃漸戸栗茶屋ニ上り鱧食大鉢也、越ヶ谷駅ニ至候処、庄右衛門今朝出立いたし候間、人馬無之趣申聞候得共、越ヶ谷より着候事二いたし候ては、明日不都合ニ相成候間、草賀迄参り方可然と半蔵申二付、直ニ草賀駅ニ至、折々雨、今日にて五日、腰駢(弁)一同難義いたし、脇本陣丸屋周助へ止宿、織人へ書状飛脚さし立ル、茶菓子出シ、水風呂二入、座付候処にて膳出し

魚身 玉子焼
皿 油揚 平 焼豆腐 汁 皿 生姜 アジ
長芋 ニラフサ 茄子

明半頃出立、草賀駅外ニ行候処、向より早馬來、駄賃、早也と申引駢、長棒十人余りにて背負走、又々声ハ胸障り、仙台歟会津ならんと思行逢候処、造酒助殿と申二付、駕籠止、戸為引、相互ニ駕籠内顔見合候処、次郎兵衛如何成ニ哉と胸トキ〜いたし、駕籠より出と申候得共、早追之御使故出ニ不及と止承候処、二万七万石庄内不殘参候、御ほ意〜と

ユデ玉子
ニラフサ
油アゲ焼
芋子
カンヘウ

悦ひ、再会約して別る、千住ニ至候処、番所有之、駕籠出歩行印鑑出し通りぬ、御出入之嘉兵衛出迎、直ニ宿ニ至息休、鈴木席七率馬連来しと申、其外下座見織人宜被仰付候とて参居、角之助御組一同、伊兵衛追々来、一同馬とも無事にて、当所へ至シヲ悦、一酒一種出し賀祝し、東都繁花、庄内にて考候より格別之事も無之、神田橋ニ至、兵部殿参、御用状さし出、清兵衛へ参り不快尋、権十郎殿へ案否、政右衛門・同男四郎二逢、萬端礼謝し、織人色々世話いたし呉候様申二付、挨拶旁尋参り、御殿へ出、頭取ニ逢御機嫌伺、御預ヶ之品相渡候処、御目通有之趣控居候処、甚大夫先達にて表御居間之二ノ間御座有之候処、直ニ入御機嫌伺候処、御立被遊、前御座付、大殿様・大前様御機嫌御伺被遊候間、御機嫌能趣申上候処、元御座付道中無滞大儀との御意有難仕合趣申上、引取候、直柳原参、藤弥二逢、夫より下谷ノ長屋着、一同馬とも無事ニ着揃千祝萬喜目出度し〜、三内父子健二郎杯と参り色々手伝、御長屋立派、且不都合は陣屋心得と候間、口説ハ不申上候、蚊数ニ御座候、酒肴も出、参候人々嘸いたし帰候、先一落付申候得共、近々柳原へ引移候故大落付不致候

廿日

曇、早天起、掃除いたし、藤弥昨日為挨拶被参ル、春之助・周作・庄右衛門・権蔵・十右衛門用事ニ参り遅刻ニ相成、御上屋敷へ仕出、兵部殿より何等之節一ノ手被 仰付候と被申達候、藤弥新徴組取扱二付御差留、御組は造酒助組着揃之上御暇被下候趣、藤弥吹聴也、一番立今日より立候趣也、御家老衆被引取候故引取、直ニ定右衛門長屋ニ寄候処被止、権蔵参り、おてつホタ餅地走也、庄内にては□うれじ、七ツ頃帰一同へ一手之事達、御屋敷内太鞍(鼓)四ツ拍子打候節御上屋敷走着候様是又達、殿様御老中御連名御奉書御至来、明廿一日四ツ時御登城之趣為知申越候、

今日飯事、朝は昨夜残物

鉢積 二歳小串
玉子焼 鉢 さし身
生姜

昼は腰付割合、御殿二開、夜膳八鱸、半蔵至来之趣地走二相成

廿一日

又々人々被仕掛、今日は二万石之祝義、諸士御殿へ出候間、一趣二参ル、私も今日御祝義申上ル、殿中御用済不残上下着、昼過割合ヲ食し、八ツ御退出、御供被為蒙仰候二付、恐悦申上ル、夫より色々御用御番頭撰やら、理屈申やら、藤弥組引返候様私申述^(候カ)やら、六ツ過御台所より大根漬二切豆腐御賄出ル、八ツ過又々前同様御賄出ル、七ツ前二漸帰
○御供仰付候間、心得可被居候様内達有之

廿二日

人々被参、今日鰯御地走、昨日取置候趣也、例刻出仕、色々御用有之、不気量者実二閉口、先々考候へハ考候程六ヶ敷相成、此よふ二世話敷事無之、家督いたしより少も尻付候事無之、飛呆^(カ)独笑いたし候より外無之

廿三日

同様世話敷殿中小走同様、御用所御小性頭呼、隙無之御郡代部屋駈廻り候得共、何分行届不申、実重役入恐候、真先ノ大いク子は沖三郎窺候斗二て、口上不添候事少事なれとも、いク子ニ外窺筆順囃被 仰付候半、張蔵申達候得共、御郡代算用二て不被仰付候由、先ツ困候事、五百五十騎之具足為持候事不相成、蒸気船詰候事いたし候得共、如何相成候哉不分

廿四日

兎角鬱陶敷天氣、色々日々半道余之往来、袴はいつれ襦高ニて茶縹最早

切レ候間、三内頼候処幸拵置候襦高有之候間直二貫候、先便差下候甘なつと大間違いたし、伊三郎参居候処、ケ様嘶いたし候処、夫は日本橋之脇二有之ト申被大笑、私明日調上ケ可申と申付頼置候処、今日持参二付明日便二又々差下候

廿五日

大雨、此頃大違冷氣二相成朝夕綿入着、蚊張も一昨頃より相止候、庄内如何可有之哉、甚不時候よふ二覚候、馬も乗建頼候積二御座候得共、今日迄休置候、大丈夫御座候間、御安事被成下間敷候、半蔵少時候障模様ニ御座候外大丈夫過、勝兵衛杯は居候事無之様、中的も召連候積、先ツ御町医□と申述置候、何分取調も閉口、来朔日一ト先ツ蒸気従者具足類大坂迄遣候積ニて、朝世話集、実二隙無之、是迄夜能寝不申、何卒六ツ過より明過迄寝候様二相成度と存居候、御笑安心可被下候

【第一冊終】

【第二冊】

(第二冊表紙)

〔朱筆〕

〔朱筆〕九月三日御飛脚立同十二日着

此日記九月三日立御飛脚便りニて同月十二日宿へ御小性頭月番より相届達候

日々控

日々留候事不相成、二三日過思出候俣折々認、御拾読可被成下候、鹿馬夕書よふ御叱、先ツ落付候迄と免事被成下候

廿日

曇、知人被懸仕、朝飯昨夜残物ニて食し、最早出仕之刻限至らんと存候

故、引出櫃開キ、襜高出候、其外御殿置候分肩衣上下を出し、衣服を入候アジロニてカフセ蓋ナル物取寄入、道筋知サル故権蔵と一趣二出ぬ、御殿二出候て御用所御小性頭詰所へ参ル、割合食し、兵部殿より被召出一ノ手被達候、是迄藤弥被仰付居候得共、新徴掛之為御差留、組今日より一番□下候二付被仰付候由、内々承候処、新徴掛之為御差留ニ相成候得共、全私ノ為ニて少馴候て十五日も過候て召由ニ御用無之ニ付引取、直ニ安藤長屋ニ参り、権蔵参り、足延色々久振ニテ雑話いたし候、おてつ取寄振舞われる、帰ニ両国橋一見いたし度故、先立定右衛門約し居候内ニ御老中御連名之御奉書御至来之趣、安藤へ為知、廻状参り候二付、安藤恐悦ニ御殿出候とて支度、早速帰候様約し、嘶いたし居候得共不帰、待遠ニ相成権蔵と帰、世話役不残参り、長州御征伐御供之由数色々々噂、儀右衛門参申ニは、先刻両国橋ニて安藤二逢候処、大汗ニ成ケ様ニて追掛候得共、見不申候とて、大口説いたしてスコ〜と帰ル処、被逢候と申ニ付氣之毒也、御用之趣藤弥為知来、四ツ頃一同帰候故伏しぬ

廿一日

天気よし、例刻出仕、沙汰之通ニ御供可被為蒙仰一同嘶也、八ツ頃御下城、弥無相違被為蒙 仰候、一同大悦不料既御供御備御人数御玄関前ニて三度鯨波声揚候由、重役不残恐悦、御前出ル、此造酒助は参府之御見目不申上候二付、御用所ニ出ル、其スタクタ、大坂御征伐其後無之事ニて実ニ御殿中騒壁ニ物なし、当席より御番頭之内御備御人数之頭撰申立ル、私昨日一ノ手も被 仰付候上は、是非御供被 仰付候様ニと申述ル、藤弥御組は昨今日と立候二付、兼て之言も有之ニ付引返候事ニ申述、藤弥よりニては我假と申事ニて、私より兵部殿へ、庄内ニて藤弥初一組ヲ一藩笑物ニいたし候二付、此度道中より引返し御供被 仰付候て、先達て之沙汰消候義至候間、是非返申度と申述候事、至極御尤ニ存候得共権

十郎殿少存寄も有之、是非下度と申候得共、被申述候処御尤故委細相相談可致と被申候二付引、此節権十郎殿御老中被参候跡二付 無間兵部殿より被委細申述ル呼、先刻被申義尤之義ニ付引返候様ニ可被致と御座候間即飛脚立今夜は宇津宮泊追飛脚立ル、其騒筆紙難尽、清兵衛出勤夜八ツ過迄御殿ニ居候、早追正蔵颯ト整誂候、食事三度いたし、御供可被仰付候間、其心得居候様ニと内達有之、藤弥 私人兩人へ大夫・騎將・持長・下大夫・御物頭・御普請奉行、組持は自組召連、御番頭水野・俣野・松宮・白井・榊原杯窺出候間嚙と可申、其外文之助・弥五右衛門為登候事は只今よりは是と役目名無之、用金甲冑掛之者兩人為登候様、兵部被申候間、申遣候筈、郷夫一組着領四領へ六人ツ、積ニて、一組へ三十六人当御備登へも同様割合いたし申述候

廿二日

天気よし例刻出仕

廿三日

大雨 例刻出仕

廿四日

朔日先荷物遣候事ニて大騒ニて清光寺知ツ、代参も遣兼候、七ツ頃帰大草臥

廿五日

日々鬱陶敷(氣脱カ)天、例刻出仕ニて私共扱之分大体ニ調も出来候

廿六日

日々鬱陶敷天氣、例刻出仕

廿七日

昨夜九ツ頃横山丁出火、寢耳ニテ往来無之様也
天気よし、丸子尋ニ参候間逢色々々嘶いたし、(ヤーゲル銃)ヤーケル一挺頼候

例刻出仕、御先荷物相止候て、先ツ世話シ又も止ミ少落付候

廿八日

天氣よし、半蔵丸子へ真綿着類為持遣、織人へ引出櫃頼置候処、整候趣
二取遣□ル、例刻出仕、日々混雜ニて日記も認兼候仕合、御察可被下候

廿九日

雨、朝ニ権蔵参り候ニ付三十六人ノ郷夫へ為着為冠候品々申付ル、例刻
出仕、大難義雨も庄内杯と違横ニ降、日々往来苦々敷御座候、口説と藤
弥「一笑候得共、兎角口説居候御笑察可被成下候、私共扱候方大極
り候間、氣草臥いたし様ニ御座候、男四郎ニ兎角浦山れ、私共扱下取扱
あしく、跡は氣込よろしく拝借杯と不被 仰付とも不苦、着領斗ハ是非
陸御送被下度と申述ニ付、尤之分故ニ廿一日後の早追ニ又々増郷夫と申
遣候筈、幾日 將軍家御出馬ニ相成候哉不相分、今日供立取極候

徒口附 小性 鎗 具足櫃 小右筆 草履取り 郷夫
一、具足 馬上 兩掛 家長鎗 薬籠持
徒口附 小性同 草り取 医者 郷夫

二、具足櫃 口附 若党 鎗 具足櫃 寺内権蔵 鎗持 同
若党 草り取 具足櫃 奥津儀右衛門 鎗持 同 同

三、同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

四、馬籠一挺

乗下私初一組へ馬四疋

一、**士分陣** 打裂羽織 小袴 輕衫 一在合勝手次第、従者は陣笠陣羽織不苦
襦高 候事

一、道中馬駱なし 一、御物頭以上幕持参候事 但道上ニて為御張被下候由

一、鎗印一同相用事 一、高張沓籠持参不及

一、礼服火事羽織持参不及

一、私共具足櫃へ郷夫五人御貸付候事

同 口附御中間壹人御貸人事

同 手附共へ郷夫壹人外ニ料紙持壹人

医者薬籠持壹人

一、一組へ具足櫃負三十六人郷夫出候積 半被笠世話役申付為拵候

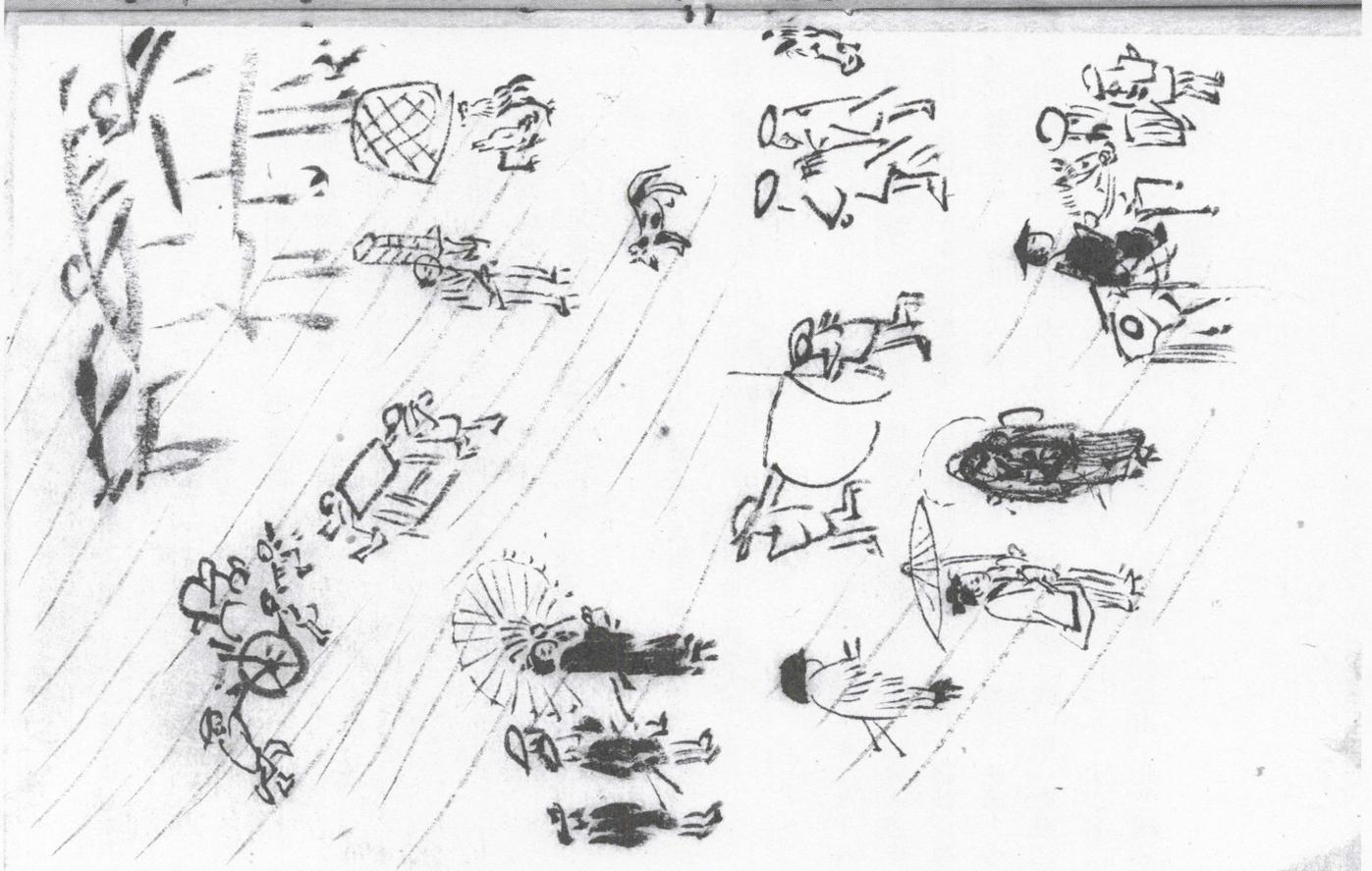
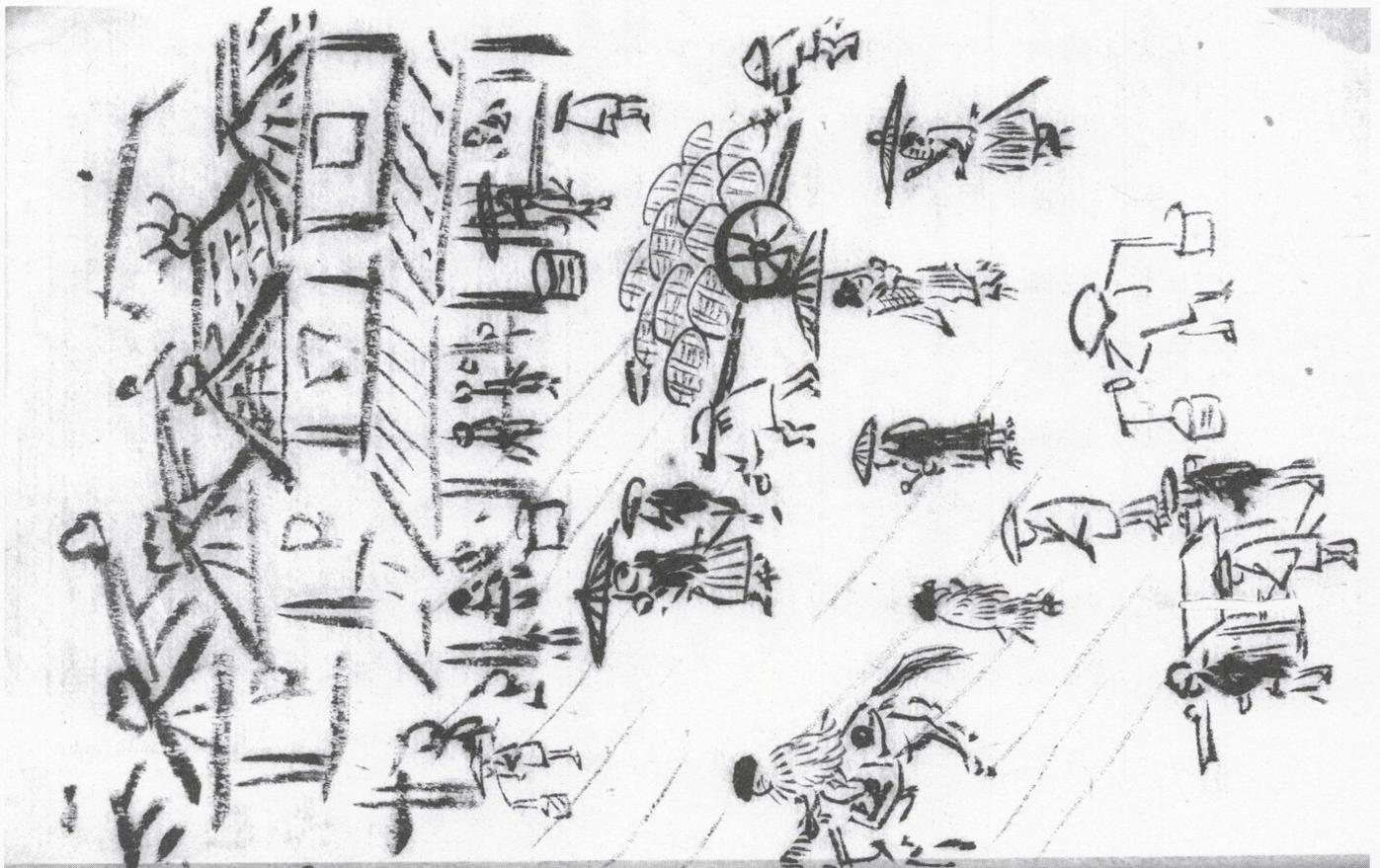
右之通

一、御備組登百二十五人へ四人へ郷夫六人当ニ御貸付候事、半被笠 御元々ニて

右之通取調申立候、廿一日ニさし出候、其後早追之節増人申立、
右之通り取極

同晦日

今日も雨天氣、伊兵衛参候間、道中人用注文頼遣、丸子へヤアケール一
挺早々出来候様ニと申付置候、間違又々申遣候、例刻過ニ相成大急キニ
出仕、毎日ノ半里程候処実ニ閉口、此方之雨は横ニ降り、羅紗合羽も
通候様御座候、扱兼々大都是往來人透無之様御承候得共、此節大透ニ
て由勝手次第第二歩行いたし何程人之不足ニ相成候者ニ哉、第一御殿之女
とも、第二ニ刀さし、筑破打手・長州打手・長門へ杯ニハ、大小名三十
頭余、筑破へ七頭余、其外国々へ又ハ京へ人数遣し置候由、此方様之御
人数杯とハ、当地ニて極たぐさんよし御座候



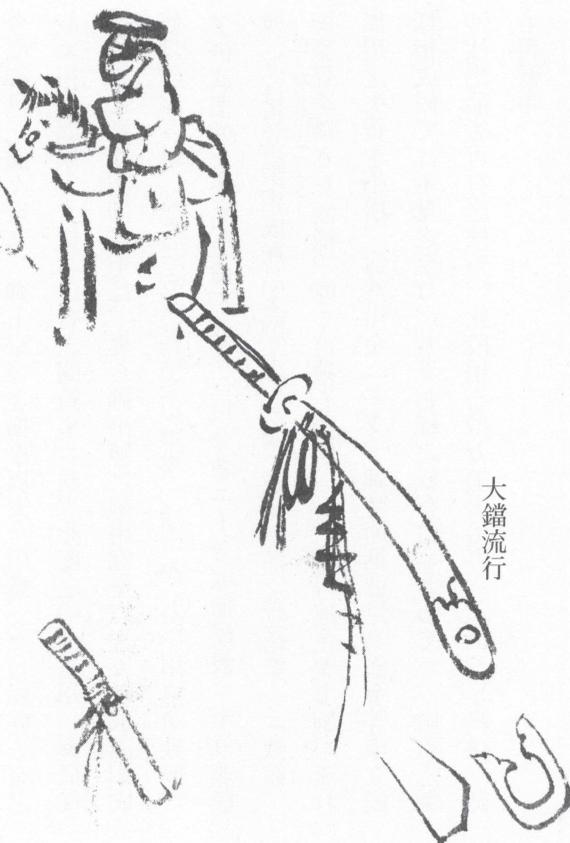
塗笠流行



蓑流行



大鐙流行



御旗本ニても
口附兩人
大流行



白足袋のみ

いつも浅黄色印付

菌染之女前髪



十七八以上



十六五以下



いつも前髪二寸位切左右如図

紫



白粉 白壁ノことし

黒天我絨襟

至極浦山敷道中娘
子ニ掛度義と心
願のみ

御殿女中両度見ル



惣模様尻いつも如白帯立流也

十六七才
にて緋縮
緬も有之

昼夜二限り



大概黒又は茶

紫二限り

繪紙ニ有之位美女両三度見タリ、白澤駅之女より能美人尔今不見

一、四ツ半頃出仕、色々御用有之、三好金弥・片岡半兵衛・多田禎藏御宿割被仰付候、登之助と門人と大論有之、先ツ静り掛役人を誉ル、御小性頭扱之方兎角六ヶ敷、私共方ハ何ニも無之、隙ニ相成御用所より出候様被御申附候間、出候処左之様

今度御供之面々は迄 御上京等之振を以夫々用意いたし候族も有之哉ニ粗相聞候、ヶ様ニは有之間敷事ニ候、此度之儀は長州 御征伐御先手と被為蒙仰候上は、専ら御出陣之御用意を以夫々御取調相成候は勿論ニ付、銘々ニも其覚悟を以軍事一途ニ為心得、用意可致候、乍併武器迎も差当金備不致族、只今急ニ十分取揃候義ニ至り兼候歟、又は見苦敷相成候品者聊不苦候間、銘々物前之覚悟第一ニ致候、色々噂有之(マ)御家聲を落さし候様、厚く可被心掛候、万一心得違花美虚飾ニ流れ無用之失費を相掛、自然用金ニ差支、御時節柄彼是為備金等申立候様相成候ては不覚之至り、若々右様之族有之ニおゐてハ、嚴重之御沙汰之品も可有之候条、此段相心得万端実用專一二いたし候様、御心得候事

八月晦日

今度 御出馬之節御供之面々着服、 御発着は勿論御道中御陣羽織之事、小袴着用之筈ニ候得共、御道中斗は割羽織着用之儀御用捨被成下候事

一、御番頭以上御供之面々六十歳以上駕籠御用捨、五十歳以上ハ願立之品ニ寄御容捨可被成下候事

但し番頭以下は一切不相成候事
右之通御供之面々為心得申達候事

席々へ申達候、此方若大将ハ駕籠相止馬ニ疋被疋候由、此両騎將は馬壹率

疋故歩行発着乗候積ニ御座候、此内も定て道中ニも出候半、如何成口説をいたし候哉と独笑いたし居候、調出不申ニ付、尔今極出来兼候事ニ有之候、実容易之義ニ無之、御物入は二万五千石可恐く、夜具持行候事を取調、向々へ申達候事、右体四人へ馬壹疋位ニて可然、困事ハ庄右衛門長風、吉弥も同様、御供も如何可有哉、無心元

一、馬休置候、最早乗候ても可然と考、疋七呼馬具出候て能見候処、下鞍無之、仕込一ツならて無之、尾袋斗有之、間合七乗廻候様頼、物はとんと見不申候得共、尔今草臥居候哉、踏落有之候趣、此度馬強不無之相成甚心配御座候、さんと掛金縁り金紋遠慮いたし候様公辺より御達有之候由ニ付、常ニは相用候処候事不相成候、鞍覆さんと掛ニ同しニ様ニ地黒金紋ニ伊兵衛頼申付候、此方ニて浦山敷ハ馬ニ御座候

九月朔日 今朝権蔵より煮豆至来、移りニ柿遣、此柿之殘風味いたし候処悪敷味日本一

朝晴上り、今日御不快ニて御登城不被遊候由、差立候時、別段大体御引込被遊候由、御目見無之ニ付、私も引込下劑相用候積ニて、冲惠呼調合為致御用候得共、余りひけついたし下不申候、晩刻マククーン掛伏候処、夜中二度下り候、八ッ過ニ可有之、雷光甚し、雨も少し降ル

【第二冊途中】